

# 2010年度ブロック研究会活動報告

## 北海道 ブロック

### ■ブロック研究会の年間活動報告

ブロックリーダー 和田佳子（北海道武蔵女子短期大学）

北海道ブロックでは、ここ数年懸案となっていた研究会開催時期をようやく秋に移行できたため、今年度は年間2回の研究会開催となった。厳しい寒さに震える2月の研究会と比べて、10月の穏やかな気候の下で開かれた研究会は好評だったため、次年度は秋開催（1回）を予定している。平成22年度の年間活動状況は以下のとおりである。

1. 第1回研究会は、平成22年10月16日（土）、札幌国際大学経済センターキャンパスで開催した。出席者は12名。以下2件の発表の後、会員情報交換会を行った。

〈発表1〉「キャリア教育の課題と展望」武井昭也（札幌国際大学）

〈発表2〉「短大卒女子のキャリア形成支援～乗り越え力を強化するためのプログラム試案」和田佳子（北海道武蔵女子短期大学）

また、研究会同日、当ブロックでは第2回目の開催となる「卒業生キャリア座談会」を実施した。大学・短大・高校でキャリア教育を受けて巣立った4名の方々から、学生時代の学びが卒業後のキャリア形成にどのように影響し、活かされているのかなど貴重な情報を提供していただいた。

2. 第2回研究会は、平成23年2月19日（土）、札幌国際大学経済センターキャンパスで開催した。出席者は13名。新入会員を含む4名の発表があった。

〈発表1〉「企業と学生から見たインターンシップ効果～企業の評価と学生の自己評価を比較して」和田早代（札幌国際大学）

〈発表2〉「短大生活による学生の能力向上の自覚～学生支援プログラムにおけるアンケート結果より」小林純（札幌国際大学短期大学部）

〈発表3〉「専門学校における観光インターンシップの実践について～北海道観光学科の学生の実態を中心に～」千葉里美（札幌商工会議所付属専門学校）

〈発表4〉「スタートアッププログラムからみる大学生のキャリア教育の課題」加藤由紀子（北海商科大学）

3. 第7回目となる学生プレゼンテーション・コンテストは、平成23年1月19日（土）、北海商科大学を会場に開催した。道内3大学（中国・韓国留学生を含む）11組の学生が出場し、学生ならではの視点による堂々たる発表が目进行いた。上位者の審査得点は僅差となり、レベルの向上を感じさせた。コンテスト結果は下記のとおりである。最優秀賞を受賞した札幌国際大学3年、向未悠さんが、6月に開催される全国大会のブロック代表として出場することとなった。

〈最優秀賞〉 札幌国際大学3年 向 未悠さん

「北海道シーニックの森～美しい景観を守るために～」

〈優秀賞〉 札幌国際大学3年 郡司 琴恵さん

「炭鉱を新たなエネルギーに」

北海商科大学（留学生） リュウ・ヤンさん

「日本人の若者が海外に留学することについて」

4. 北海道ブロックは現在会員が34名で、ここ数年大きな増減は見られないが、新たな会員の入会や若い先生方の発表が続き、活気ある1年となった。少人数であるがゆえのアットホームな雰囲気の中で、今後も相互に情報交換・情報共有を図りながら研鑽し、研究活動を推進していきたいものである。蛇足ながら、毎回開かれる研究会後の懇親会も、美味しいワインを囲んで和気藹々であった。次年度もぜひ多数の参加を呼びかけたい。



#### 研究発表（1）

##### キャリア教育の課題と展望

武井 昭 也（札幌国際大学）

キャリア教育の課題と展望について、日本のキャリア教育の特質・若者のキャリア発達における問題の所在・キャリア教育の展望の三点に論究した。

発表者は我が国のキャリア教育の発展を展望する上で、第1にキャリア教育の目標として、キャリア発達ということの中に、「知・情・意・価」の面を適切に位置づけること、価の面を過大に要求しないこと、第2に、キャリア形成における職業の重心的な役割を再確認し、制度や過程の中に反映させること、そして第3にその制度・過程の問題として、以下の5点の構造化を提案した。〔①生徒・学生に将来の職業や専門を主体的に選択させるための体系的キャリアガイダンスとカウンセリングの実施 ②通常教育課程のキャリアの視点からの捉え直し ③職業や労働に関するインテンシブな教科目の設定 ④キャリア一般に関する啓発的体験の教育的組織化 ⑤キャリアに直接・専門的に準備する職業能力開発〕

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

#### 研究発表（2）

##### 短大卒女子のキャリア形成支援

##### ～乗り越え力を強化するためのプログラム試案～

和 田 佳 子（北海道武蔵女子短期大学）

雇用環境が厳しさを増し、特に短大卒女子の就職機会が狭められている。筆者が所属する短大では、学生はもとよりキャリア発達途上で苦戦する卒業生のひ弱さを、いかに克服するかが喫緊の課題である。早期離職の抑止やメンタルサポートを目的として昨年開設した「キャリア・アシストセンター」には、卒業生から年間24件の相談が持ち込まれ、その内容はいずれも「社会的乗り越え力」を要するものばかりであった。経験値の低さを課題とする短大生に対しては、就職に直結する実践的なテクニックを身につけさせる以上に、幅広い教養的な学びの習慣を身につけさせることが先決との考えから試行した「カルティベーション・プログラム」等について報告した。「キャリア形成力は、学びの習慣と自己啓発力である」（矢野、2009）ことから、当プログラムによる教養的・自己啓発的経験が、キャリア形成の基盤となる「乗り越え力」強化につながることを期待したい。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) ビジネス実務プログラム開発と教材開発プログラム

#### 研究発表（3）

##### 短大生活による学生の能力向上の自覚

##### ～学生支援プログラムにおけるアンケート結果より

小 林 純（札幌国際大学短期大学部）

本学短期大学部で取り組んでいる「キャリアパスシステムの構築」は、学生の学びや大学生活をポートフォリオにまとめることで可視化し、自律的な成長を促すための環境づくりを目的としている。学生本人の自己評価には経済産業省が提唱する社会人基礎力を包含したキャリアパス基礎力を20項目設定し、年3回の自己評価を行っている。この結果をもとに学生は目標設定や反省を行い、教員との面談の基礎資料として活用している。

学年終了時にキャリアパス基礎力の向上を実感しているかを問うアンケートを実施した。学生の自己評価では「実行力」「健康維持」「傾聴」などの項目で成長を自覚している学生が多い。高校を卒業して自由な時間が増えたことや、一人暮らしなどで生活の自立が求められた結果であると考えられる。その一方で「創造性」「自己表現力」などの能力が向上したという回答は少ない。他人とは違う意見やものを作り出すことを苦手としている学生が多いことを示唆している。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) ビジネス実務プログラム開発と教材開発プログラム

#### 研究発表（4）

##### 企業と学生から見たインターンシップ効果

##### ～企業の評価と学生の自己評価を比較して～

和 田 早 代（札幌国際大学）

近年、大学教育では「インターンシップ」が授業科目として定着しつつある。本学でも、道東の阿寒湖温泉「鶴雅グループ」と提携を結び、3週間のインターンシップを行なっている。ここでは従来の就労体験型に加え

て、社員が講師となって講座や実習を組み合わせている点が新しい試みである。さらに、地域と連携して観光産業を活性化させている企業の姿を学ぶことができる。

今回は、観光人材の育成に従事した社員の評価と、学生の自己評価についてアンケート調査を実施して学習効果の検証を行なった。学生の将来設計や職業適性、身についたことなどを明らかにするとともに、観光関連企業が求める人材像を分析し、評価との相違点を明らかにした。その結果を踏まえて、人材養成を担う大学の役割と今後の課題について考察を加えた。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 3) 個人とチームの実務能力の開発

#### 研究発表（5）

##### 専門学校における観光インターンシップの実践について

##### ～北海道観光学科の学生の実態を中心に

千 葉 里 美（札幌商工会議所付属専門学校）

札幌商工会議所が運営する本校は、時代のニーズにあった学科・科目編成を施しながら56年間に亘り即戦力となる人材教育に取り組んできた。こうした背景の中、観光人材育成を目的に2009年、北海道観光学科が誕生した。2年次4～5月の約2ヶ月間、学科全学生に課せられる「観光インターンシップ」は、観光関連業界で実践的な就業体験ができ、かつ業界をより深く理解することができるため、学生の満足度は高くキャリア形成にも期待が高い。本発表は、初めて実施した「観光インターンシップ」の充実改善を目的として、学生アンケート結果を中心に、実態と課題を明らかにした。全体的習得要素「接客技術」「業界への理解」「規律」「自己本質」「働くイメージ」が明らかになり、2週間のインターンシップ期間で効果が出やすい領域「規律性」「表現力」「理解力」「積極性」「協調性」と出にくい領域「専門性」「企画力」が明らかになった。また、事前教育のあり方に関する課題も見えたことで今後効果的な指導へ繋がる機会ともなった。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 3) 個人とチームの実務能力の開発

#### 研究発表（6）

##### スタートアッププログラムからみる大学生のキャリア教育の課題

加 藤 由 紀 子（北海商科大学）

ジョブスタートプログラムは、事業者が新卒未内定の大学生を約6カ月間雇用したうえで、研修や企業実習などを行いながら早期の就職を目指す



すものである。このプログラム管理者へのヒアリングや、留学生に対する就職支援の留意点などから、学生個人の問題とは別に、大学のキャリア教育の位置づけや、キャリア教育で補完すべきものなどが浮かび上がった。在学中に内定をとれない学生に対する評価は、学生自身の問題と片付けられるケースが多いが、キャリア教育を発展させていくためには、このように外部のカウンセリング内容やジョブスタートプログラムから得る情

## 関東・東北 ブロック

### ■ブロック研究会の年間活動報告

ブロックリーダー 坪井 明彦（高崎経済大学）

#### 1. ブロック研究会報告

第38回関東東北ブロック研究会は、平成23年2月13日(日)に鶴見大学会館において開催された。参加者数は42名であった。

(1) ブロック助成研究発表(研究発表要旨参照)

「学生3言語に関する研究」

「新卒採用における学生と企業のミスマッチ解消に向けての考察」

(2) 学生プレゼンテーション発表会

| 学校名            | 学生        | タイトル                                 | 指導教員  |
|----------------|-----------|--------------------------------------|-------|
| 1 国際短期大学1年     | チャイアピニラチャ | Amazing Thailand                     | 細川 美穂 |
| 2 国際短期大学1年     | 黒澤 綾香     | インターンシップ体験—中野区役所—                    | 細川 美穂 |
| 3 湘北短期大学1年     | 大野 麻衣     | 目指せ う首領(ドン)!                         | 佐藤 知条 |
| 4 湘北短期大学1年     | 知念 里奈     | 私を見て!                                | 佐藤 知条 |
| 5 自由が丘産能短期大学1年 | 松崎かごめ     | ネットが教えてくれたこと<br>—私のインター(ナショナル)ネット体験— | 菅井 郁  |
| 6 聖雲女子短期大学1年   | 高橋 凜      | ベットの隅に想う                             | 佐藤 恵  |
| 7 常盤短期大学1年     | 林 李香      | 甘ったれ卒業!                              | 高橋眞知子 |
| 8 常盤短期大学1年     | 増渕 麻美     | 負けず嫌いに磨きをかける私                        | 高橋眞知子 |

最優秀賞は松崎かごめさん、優秀賞は増渕麻美さんおよび知念里奈さんとなった。



(3) 研究発表(研究発表要旨参照)

「キャリア教育の一環としてのビジネスマナー教育の効果測定」

(4) 就職支援バズセッション[問題提供者:大宮登(高崎経済大学)]

最近の深刻な就職難を背景として、今、教員たちがもっとも関心をもっているテーマである「就活支援」について、高崎経済大学の大宮登先生の問題提供の後、バズセッションが行われた。大宮登先生のお話に刺激を受け、5～6人の各グループで現在の学生の就職活動の状況や問

題などの分析を行なっていく必要がある。また、これからのキャリア教育に求められるものとしては、地域と連携してのキャリア開発や、学生同士のピアチューター制度など、多様な価値観をもつ人達との係り合いを創出し、その中から不足を補完し、最後まで諦めないことを支援していくことであると考えている。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

題点について具体的に討議をした。その中のあるグループでは大宮登先生が提議した、学生の成長のための要素である「学生が主体となる」ための教育や援助をどのようにすればよいのかに、それぞれの教員が具体的な施策を披露していた。

#### 2. 共同研究カテゴリーC(会員が適宜企画し開催できる研究会)報告

(1) 「気づきのコミュニケーション～事例発表と似顔絵描写の指導法～」

石井 典子（東京経営短期大学）

共同研究カテゴリーCとして、10月16日(土)、JOB&LICENSEスクール水道橋校において出席者10名により行われた。今回は、東京経営短期大学のビジネスマナーの授業の中で実施した“気づきのコミュニケーション”の一環として受験した“似顔絵検定”についての事例発表と併せて、似顔絵のプロ(似顔絵インストラクター中村剛氏)を関西よりお迎えして、似顔絵描写の指導方法を実技を交えて実施した。

事例における“気づきのコミュニケーション”では、自分本位でものを考えたり見たりするのではなく、相手の欲求や要望などを察知し“気づく”豊かな“感受性”を育てる、あるいは、“記憶力”や“集中力”の養成に役立つなどのことから、似顔絵を取り入れた経緯について発表した。また、似顔絵描写の指導方法においては、歴代の日本の総理大臣の写真によっての似顔絵練習、出席者一人ひとりをモデルに全員で描く似顔絵練習など、プロによる評価を交え和気藹々の中で楽しく受講していただいた。

#### 研究発表(1)

##### 学生3言語に関する研究

佐藤美津子・高橋順子・齋藤裕美(多摩大学)・長谷川美千留(八戸大学)・山本美奈子(株式会社メディネット)・田中敬子(コムネット)

企業のグローバル化に伴い、英語、情報、会計の知識はビジネス実務上の情報を伝達・理解する上で必須のツールである。これらの三要素を大学卒業までに養成すべき「学生3言語」と呼び、社会人基礎力としてどのように育成するべきか、そのあり方、方法などを研究した。

まず、行政、企業が学生にどのような能力を求めているかを整理した。行政も企業も学生に求める能力は、コミュニケーション能力が重要であることを確認したが、一言でコミュニケーション能力と言っても、求めるコミュニケーション能力は様々であった。次いで、その能力を大学教育で具体的にどのように育成するかを本研究会では「学生3言語を通じてコミュニケーション能力を育成することである」とした。

さらに、本研究会の目的である「学生3言語」を効果的にどのように能力育成すべきかについては、能力の「見える化」が必要であると考えた。その理由は、第一に、グローバル人材を求める人事労務管理に対応す

るため、第二に、大学のユニバーサル化やゆとり教育世代の学力低下への対応のためである。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

#### 研究発表(2)

##### 新卒採用における学生と企業のミスマッチ解消に向けての考察

渡邊大輔(株式会社クオリティオブライフ)・大宮智江(川口短期大学)

本研究では、前回の「「情報」のマッチングから考察する学生の就職活動と企業の採用活動」を引き継ぎ、高崎経済大学同窓生(平均30歳の若手／平均57歳のベテラン:計65名)にキャリア形成アンケートを実施、【学生×企業×OBOG】の観点から、新卒採用における「情報」のマッチングについて深化を行った。

具体的には、OBOGに対するアンケート設問の「仕事を継続する上で重視する項目」と「今現在、どんな企業情報を得ておけば良かったと思うか」という2点に着目し、新卒採用時、学生はどの情報をより深く企業から入手しなければならないか、企業はどの情報をより自社の魅力として訴求しなければならないか、を明らかにした。

結論としては、OBOGは新卒採用時の「情報」として、「人材育成が行われ自己成長できるか」という項目を最重要視しているが、企業、学生はさほど重視しておらず、大きな差異が見られた。つまり、〈採用⇒就職〉と



## 中部 ブロック

### ■ブロック研究会の年間活動報告

ブロックリーダー 岡野 絹枝（金城大学短期大学部）

中部ブロックでは、2009年度に会員数100名を達成したが、その後、退会者数が入会者数を上回り、2010年度には94名になった。しかし、会員諸氏の活発な研究交流は変わらず、定例のブロック研究会も活況を呈した。以下、2010年度の活動について報告する。

#### (1) ブロック運営委員会

運営委員9名による委員会を3回開催した。5月の第1回では、初の富山開催となる研究会の企画を行った。また、年間収支について予算化することも決定した。9月の第2回は、視察を兼ね富山で開催し、主管校(富山短期大学)の実行委員を交えての打ち合わせを行った。また、次期運営委員改選に伴う新リーダー・サブリーダーの候補について協議し、委

いうある種瞬間的なマッチングに加え、〈採用⇒定着〉という継続的マッチングをはかるには、上記「情報」の取得、提供が重要であることが分かった。

【参照アンケート】

大宮智江(川口短期大学)・渡邊大輔(株式会社QOL)「高経大卒業生キャリア形成アンケート」2011

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1) ビジネス環境と実務

#### 研究発表(3)

##### キャリア教育の一環としてのビジネスマナー教育の効果測定

藤原 由美・菅井 郁(自由が丘産能短期大学)

経済不況によりきわめて深刻な就職難が続いている近年において、ビジネスマナーに関わる教育はキャリア教育の一環として多くの大学や短大などにおいて広く実践され、新たな注目を浴びている。

本研究は、学生及び教員の学習達成度評価を正確に把握することで、キャリア教育の一環としてのビジネスマナー教育の必要性和今後の可能性について考察しようとするものである。筆者らは、2010年度に担当した自由が丘産能短期大学における「ビジネスマナー」の授業の最初と最後に、受講生に対して同一の学習達成度の自己評価を行った。さらに当該科目を担当した教員にも同様の学習達成度評価を行うことによって、より明確で客観的な効果測定を実施することができた。

これらの調査・分析の結果、ビジネスマナー教育が一定の効果を上げたことを客観的に確認し、キャリア教育の一環として意義があることを明らかにした。

最後に、授業担当教員と学生の教育効果との関連性、他科目との連携、就職活動及びキャリア形成における教育効果の継続調査という今後の課題を示した。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

員構成案を決定した。第3回は、研究会の前後に開き、研究会の運営分担、ブロック会報の発行、来年度の活動予定などをとりまとめた。

#### (2) ブロック研究会

2011年1月8日(土)・9日(日)の2日間にわたり、富山国際会議場において恒例の研究会を開催し、会員等41名とプレゼンテーション・コンテスト出場学生10名の計51名に、引率の先生や応援の学生達も加わり、大勢で賑わう初日を迎えた。学生プレゼンテーション・コンテストは、今年6年目を迎えただけでなく、30周年記念全国大会の予選となるため過去最多の出場者となった。懇親会では、富山名物の披露などもあり、有意義でしかも楽しい研究会となった。主なプログラムは次のとおりである。

助成研究報告(1件) 研究発表(7件)

学生プレゼンテーション・コンテスト(10名8組出場)

#### (3) ブロック会報の発行

運営委員の協力により、B5版4頁のカラー版会報ができ上がり、総会議事録と併せて、3月上旬に会員諸氏へ郵送配付した。

#### (4) 来年度に向けて

1月の研究会時に行った総会において、次期ブロックリーダー、サブ

リーダー、新運営委員が承認され、来年度は、米本リーダー（岡崎女子短期大学）以下7名の運営委員構成となる。なお、来年度の研究会については、2012年1月7日(土)・8日(日)に、岡崎女子短期大学において開催することになった。

## 助成研究報告 起業意識を高めるビジネス実務教育

川口直子（愛知学泉短期大学）、水口美知子（名古屋経済大学短期大学部）、河野 篤（中部学院大学）、平田祐子（高田短期大学）、寺島雅隆（愛知学泉短期大学）

起業意識は、起業家精神を鑑みる上において、被雇用者においても必要な意識となりつつある。アンケート調査による統計結果により、起業意識を高めるためには、組織学習を組み込むことと、実社会におけるビジネスパーソンに接することが有意であることが明らかとなった。

本発表においては、その要素を組み込んだ具体的な授業事例を紹介した。そのような授業は、授業担当者の意欲と工夫次第では、学生にとってより効果の高い授業となる可能性が高い。さらに、ビジネス実務教育として、その要素を組み込んだシラバスを提案した。

今後、学科内の教員や授業の連携を推進し、全体としてよりよいカリキュラムを実施することを行っていきたい。時代の変化に対応した人材を育成するためには、ビジネス実務教育そのものが変化をする必要性があると考える。

本研究は、中部ブロックの助成研究を受けており、多くの方々のご協力をいただき、ここに感謝の意を表します。最後に、河野篤先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究  
【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

## 研究発表（1） カルテ・ディクテーションにおける必要技能調査 ー米国病院視察による事例調査からー

米 本 倉 基（岡崎女子短期大学）

本発表は、カルテ代行記入秘書の職務と必要な能力等について、先行する米国ハワイ州に所在する3病院の事例現地訪問調査の報告である。調査によって、米国におけるカルテ代行記入は、医師の音声録音をまとめて文字化代行するトランスクリピニスト、専用の用語と書式を具えた自動音声文字化変換ソフトの導入、診察室内で医師診療行為を直接目視し、カルテ端末にリアルタイムで文字入力するトランスクライバーによって行われ、特に最後のライブ型のトランスクライバーは、ドクターが音声録音する作業負担もなく、その場ですぐに記載事項も確認できるメリットもあって、医師のニーズも極めて高く、我が国でも専門職としてさらに活発に養成すべき職種と考えられ、調査で入手できた米国の職務要件書等と日本の先行事例を分析し、養成教育プログラムの策定を目指したい。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

## 研究発表（2） 本学における簿記教育上の問題把握と仮説検証 河 合 晋（岡崎女子短期大学）

本研究は、学生が簿記を学ぶ上での障害は何か、どのようにして簿記が嫌いになるか、簿記のどこが難しいのかという点について、現状の問題把握と仮説検証を実施したものである。

学生は入学当初において、簿記会計に対し学習意欲が高い。就職対策として資格取得への意欲もあり、日商簿記検定は重視している。しかし、その途中で学習意欲が失せ、簿記会計に挫折してしまう学生が少なからず存在する。

こうした現状認識を踏まえ、本学を中心とした学生に対しアンケート調査を実施し、統計ソフトを用いて簿記会計への好き嫌いを諸要因によって判別分析し、何を乗り越えれば簿記学習が好きになるのか特定することを試みた。その上で、現状の簿記会計教育に改善の余地があるのかを検証した。その結果、学生の簿記嫌いの最大の要因は「仕訳」にあり、「コンピュータ会計」で簿記に慣れさせることが、簿記学習への再チャレンジとなりうること等が分かった。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

## 研究発表（3） プレゼンテーションツールとしてのISO32000-1の活用について 町 田 由 徳（岡崎女子短期大学）

プレゼンテーション用のソフトウェアとして、Microsoft社のPower Pointが圧倒的なシェアを占め、教育現場やビジネス実務の現場においても幅広く使用されているが、本研究ではPower Pointをプレゼンテーション用ソフトウェアとして使用する際に生じる様々な問題点を明らかにし、それに代えて、2008年に国際標準化機構によって認証された電子文書形式である、「ISO 32000-1」をプレゼンテーション用のドキュメントとして使用する事を提起し比較、検証を行った。

研究を通じて、制作したドキュメントの再現性、互換性の高さや、導入に関わるコストの低さといった点で、ISO 32000-1形式は優位に立っているが、制作したスライドを改変する際の柔軟性や、特殊効果の付与などの点について、課題を有している事が明らかとなった。今後はこうした点を踏まえて、より利便性の高いプレゼンテーション手法の研究を進めたい。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

## 研究発表（4） コース別インターンシップによる就業力育成 ー平成22年度大学生の就業力育成支援事業で目指すものー

水 口 美 知 子（名古屋経済大学短期大学部）

過去3年間の現代GP（社会人基礎力の育成）の取組で、アセスメントによりある程度の成果が確認できた。また、平成22年12月実施の「仕事の意識とキャリアの明確さ」に関するアンケート調査では、学生の仕事に対する意欲が入学時よりも上がったこと、キャリアが一層明確になったことが分かった。この要因として、インターンシップ、キャリアデザイン論、既存の実務家を招いた科目などが上位に挙がった。今回の就業力育成プログラムでは、多様な価値観を持つ学生、就業意識が希薄な学生をいかに積極的就職活動に導き、長く仕事に定着させるかを課題とした。具体的な方法としては、以下の3つである。

①各コースに即した実務家の科目を新規に配して、それぞれをロールモデルとして、細部にわたる知識を得る。

②学内・学外インターンシップで、社会人としての意識と組織の役割・協働を体験的に学ぶ。また、キャリアの方向を明確にする。

③電子カルテの導入で学生情報、企業情報を一元化し、キャリアカウンセラー、教職員による緻密なキャリア相談に応じる。

これにより、業界や職種によるコンピテンシーの習得を目指し、高い就業力へとつなげる試みである。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

## 研究発表（5） 大学・短大と専門学校のボーダレス化についての一考察 奥 村 幸 夫（愛知産業大学短期大学）

景気はバブル崩壊後、低迷を続け2007年には金融恐慌となった。2003年専門学校（ピーク時）に約70万人在籍していたことを考えるとその存在は無視できない。専門学校は卒業時に専門士を取得できるが、これが1994年大学3年次編入学資格となった。2005年は2,319人が編入学した。一方、大学を卒業して専門学校に再び入学する学生も18,531人に及んだ（2006年学校基本調査）。あえて言うならば、「専門学校は就職させるところ、大学は研究するところ」というすみ分けができにくくなってきたのである。本学は通信教育部のみの短期大学であるが、その両方の学生が在籍している。いわゆるダブルスクールの学生である。このボーダレス化は今後も減ることはないだろう。したがって、お互いの高等教育機関が社会のニーズ、学生のニーズに対応したカリキュラムの整備と教育の多様化の中で、いかにアドミッションポリシーを作り上げるべきかが問題である。また、大学・短大と専門学校の相乗効果にも期待したい。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

## 研究発表（6） 大学・短期大学における企業倫理教育の確立へ向けた予備的考察 矢 口 義 教（富山短期大学）

本研究では、日本の高等教育機関における企業倫理教育に関する報告をした。また、本研究は、具体的に望ましい企業倫理教育の在り様について提言するものではなく、今後そのようなことを行っていくための予備的な考察と位置づけた。

## 近畿 ブロック

### ■ブロック研究会の年間活動報告

ブロックリーダー磯 林 征 一（園田学園女子大学）  
近畿ブロック研究会の年間活動は次のとおりである。

まず、企業倫理の定義について述べ、その後、企業倫理、CSR、コーポレート・ガバナンスの三者間の関係性についてまとめて、企業倫理そのものの概念を整理した。ついで、大学・短期大学における企業倫理教育の意義を考えるために、企業不祥事に従業員が大きく関与することを構造や組織人格といった点に求め、正しい企業観・倫理観を教授することが企業不祥事の予防だけでなく、学生個々人のキャリアパスにとっても必要であることを指摘した。そして、日本の大学・短期大学における企業倫理教育の状況調査より、日本のビジネス系高等教育機関においても、徐々にではあるが、企業倫理教育が普及しつつあることを指摘した。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

## 研究発表（7） 携帯メール利用によるネットワークとその応用 國 田 千 恵 子・田 畑 圭 介・小 林 淳 一（金沢学院短期大学）

学生が日常的に利用している携帯メールを使って教員学生間のネットワーク作りを行い、学生生活の充実に寄与できるよういくつかの試みを行っている。一つは携帯メールを通じた事務連絡と学生教員間の質問・相談のやりとりである。これまで学生への伝達手段として掲示が通例であったが、掲示を見なかったり、見ても反応しなかったりする学生が目につき、対応に苦慮することがあった。こうした事例に対し、友人からの携帯メールに返信しなければいけないという心理と、連絡メールに対応しなければいけないという心理を重ね合わせることで、事務連絡に迅速に対応させる試みを行っている。二つ目は携帯メールを使った学生の就職活動支援である。内定者の体験談を学生に配信し、学生の目線に立った情報を有効に活用してもらっている。内定者に質問したい場合には、担当教員を経由して質問事項を内定者に送り、返答内容を全学生に送信し学生目線の情報を共有してもらっている。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1) ビジネス環境と実務

### 1. ブロック運営委員会

委員会開催は例年、研究会の開催に合わせているが、今期はリーダー交替への対応、近畿が担当する第30回記念全国大会の準備委員会開催も必要となり、次の日程で計4回実施した。2010年8月30日・10月9日・11月14日、2011年2月26日。

### 2. 共同研究助成

1) 平成21・22年度助成「学生によるプレゼンテーション評価データの分析ー学生へのよりよいフィードバックの検討ー」足塚智志（大手前大学）



畑野清司(四條囃学園短期大学)

2)平成22・23年度助成(応募無し)

### 3.ブロック研究会

例年どおり年2回開催を計画していたが、残念ながら9月に開催を予定していた研究会には発表者が集まらず中止せざるを得なかった。よって、今期は1回のみで開催となり、次のとおり第45回の研究会を開催した。

日時:2011年2月26日(土)12:30～17:20

場所:大手前大学 さくら夙川キャンパス

内容:①総会(前年9月に実施する予定であったが、中止になったため)

②研究助成報告 1件

③学会受託研究 1件

④学生によるプレゼンテーション大会 6名

(全国大会に向けての予選として)

⑤研究発表 4件

出席者は会員24名、非会員4名、計28名であった。研究会後、懇親会を行い和やかに楽しい時間を共有し、親睦を図った。

### 4.第4回 学生によるプレゼンテーション大会

今回は6月に行われる全国大会への出場者を選抜する大会として参加者を募り、4校から6名の学生が発表した。テーマは次のとおり。「あなたは大丈夫? 若者のインターネットトラブル」「セラピードッグ-心のケア-」「うつ病-薬に勝る人とのつながり-」「カナダ・バンクーバーでの異文化体験」「あなたの初恋の香りは? -堺の伝統産業・香の魅力-」「検証・私たちの就職活動-面接編-」

構成やスライドのデザインに工夫があり、発声・表情・話し方などの表現方法もしっかりと身につけ、堂々とした発表ばかりであった。自身の経験に基づいた発表は説得力があり、自分自身で撮影した写真を使うなど、オリジナリティに溢れる発表が多かった。会場審査員の投票の結果も踏まえ審査を行い、最優秀賞として1名を選出し、次点の学生を2位とした。

### 5.今後の課題

最も大きな課題は第30回記念全国大会を無事に開催し、会員の皆様にとって有意義で実り多い大会にすることである。現在、ブロック運営委員会を中心に、会場校である大手前大学所属の学会員とで実行委員会を発足させて準備を進めている。

各大学・短期大学の厳しい事情もあり、ブロック研究会の研究発表件数や参加者数が減少し、日程の調整も難しくなっている。より多くの学会員が集まり、ブロック研究会が情報発信・収集の場、研鑽の場とするための方策を考えたい。

### 2009・2010年度研究助成報告

### 学生によるプレゼンテーション評価データの分析

#### ー学生へのよりよいフィードバックの検討ー

足 塚 智 志 (大手前大学)・畑 野 清 司 (四條囃学園短期大学)

学生へのよりよいフィードバックを行うために、フィードバックカードを作成した。評価項目は、スライドの出来、内容の良さ、声の出し方、発表態度、時間などの5項目とし、評価基準は、改善したほうがよい(-1点)、よい(0点)、優れている(1点)の3段階評価法を取り入れた。このフィードバックカードを利用した授業を2例報告した。とくに事例2では3回の発表を行い、1回目と2回目のフィードバックカードの集計点を比較したところ5名が顕著に高く、この結果は1回目と3回目の自己評価の集計点の比較においても同じ5名に相違が認められた。

さらにこの抽出した5名に絞り、外部評価点の分析、フィードバックの4項目の比較を行い、自己評価結果からどの点を改善したかを比較したところ、資料収集、時間の考慮、リハーサル、発表態度に共通の改善点が認められた。またフィードバックは、発表直後より次回構想・制作段階で学生へ行った方が効果が認められた。

研究対象領域:【1】ビジネス実務教育開発研究 1)ビジネス実務プログラム開発と教材開発プログラム

### 受託研究中間報告

#### 「きく・話す」能力の教育技法 ー社会人基礎力を中心としてー

油 谷 純 子 (目白大学短期大学部)・有 働 壽 恵 (芦屋女子短期大学)中 川 伸 子 (神戸女子短期大学)・仁 平 章 子 (四條囃学園短期大学)・服 部 美 樹 子 (大阪学院短期大学)・福 井 愛 美 (大手前大学)・加 藤 晴 美 (ブール学院大学短期大学部)

近年、ビジネス現場でのコミュニケーション能力の必要性がますます高まっているが、高等教育卒業生のコミュニケーション能力と、ビジネス現場の求めるそれにはギャップがあるのではないかと推察した。

そこで、次の3点を目的として研究を進めている。①高等教育卒業生が備えるべき「きく・話す」能力を明確にする、②それらの能力獲得の効果的な教育方法を検討する、③その教育を実現するシラバスの構築をする。

まず、現在、大学・短大で開講されているビジネス実務関連科目における「きく・話す」能力の要件を抽出した。そして、企業に対してコミュニケーション基礎力に関する調査を実施した。これらの結果を踏まえ、「きく」を「聞く・聴く・訊く」の意味を含んだ能動的・創造的なものと捉え、思考力や批判力を高め「伝え合う力」の向上を図ることに重点を置いたモデルカリキュラムを構築した。

今後はモデルカリキュラムの具体的な展開を図り、教授法を研究する。研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 1)ビジネス実務プログラム開発と教材開発プログラム

### 研究発表(1)

#### 日本経済を好転させるビジネス系検定1級

小 林 正 彦 (元・大阪経済大学)・林 正 和 (大阪経済大学4年)

「ビジネス系検定で学んだことを参考にして、日本経済を好転させるヒントを探りたい」という学生の提案で、表題に取り組んだ。研究は、大学正

門前のお好み焼き、店主インタビュー、訪れる顧客アンケートで構成された。学生は、表題の考察から以下のヒントを示唆した。つまり、2011年7月24日からスタートするデジタル化がチャンスだ、という。デジタル化を機にビジネス系検定1級で学んだスキル(情報システムの企画、構築、運用業務の一括請け合い)を活用して、経済立国ジャパンを構築できるという概念だ。経済の閉塞感を憂慮し、問題解決の計算手順、つまり、アルゴリズムも理解できる。例えば、学生は、IPアドレス枯渇問題を容易に提起できる。IPアドレスV6というプロトコルへの変換も知っている。高度情報化社会に育ち、情報リテラシーを日常生活の中で自然に高めてきた学生の情報システム、概念、直感力に期待をしたい。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 3)個人とチームの実務能力の開発

### 研究発表(2)

#### 工業技術ビジネス実務教育論に関する研究1

##### ー工業技術ビジネス実務教育の概念試論ー

林 雄 太 郎 (大阪キリスト教短期大学)

目的:今後の我が国の道は一層の高度技術社会の構築であるが、現在のビジネス実務教育は情報教育以外の工業技術分野は不十分であり、工業技術を支援・補完・補佐等の工業技術事務を行うビジネス実務教育の構築を思考する。

結果:工業技術ビジネス実務教育に必要な教育内容を要約すれば、①工業概論 ②自動制御システム概要 ③防災管理の知識 ④危険物取扱概要 ⑤放射性物質・X線取扱の基本知識 ⑥電気知識 ⑦イノベーション論 ⑧廃棄物処理と資源回収の基本 ⑨省エネルギーの知識 ⑩機械・機器の稼働管理事務業務 ⑪技術文献の整理と保管業務 ⑫技師長等幹部の秘書・事務業務等である。且つ、工業技術分野の為に、工業分野との連携教育が必要。

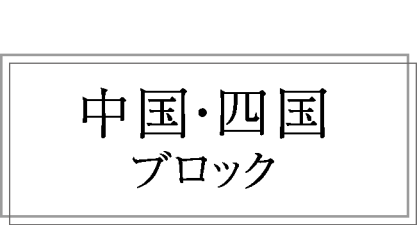
●分野横断的多樣的工業技術ビジネス実務教育体制の確立が必要。尚、教育体制はビジネス実務を知り抜いている現教員が講習会等で研修する教育体制が必要である。本論は実務教育概念試論であり本学会で今後精緻な構築を進めて行く。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1)時代を切り拓くビジネス実務

### 研究発表(3)

#### 女子大学生の資格概念についての意識調査

樋 口 勝 一 (神戸海星女子学院大学)・仁 平 征 次 (四天王寺大学)



#### ■ブロック研究会の年間活動報告

ブロックリーダー-山 野 邦 子 (高松短期大学)

#### 1.ブロック運営委員会開催およびブロック会報の発行

資格ブームの昨今、資格取得を希望する学生が多く見られるようになってきた。今回の研究では、神戸海星女子学院大学1年次生全員(有効回答数66)に対して行った「資格に関する意識調査」の結果を報告する。紙面の都合上、代表的な調査結果を取り出す。

・資格取得を全員希望し、その理由は就職のためである。

・一人あたり平均3.6種類の資格取得を希望している。

・資格は大学選びに影響した(65%)。

・資格の区分(国家・公的・民間)と資格と仕事の関係について説明を受けていないにもかかわらず半数が知っている。

・資格についての説明を受けていないし、それがあった方が良いと大多数が考えている。

以上から、今後、資格に関する知識を教授する講座を開発し、開講する必要があると考える。また、学生からの支持の多い「資格」ではあるが、実際に採用側の企業がどのぐらい評価しているかを調べる必要もある。将来の課題とした。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 3)個人とチームの実務能力の開発

### 研究発表(4)

#### 『大学における社会的・職業的自立に関する指導等の推進』施策に関する一考察

前 角 和 宏 (神戸海星女子学院大学)

大学生の就職活動が激化していく中で、大学設置基準等が改正された。本報告では、労働市場、労働法制、大学・大学生の現状を提示したうえで、この改正に基づき大学生のキャリア形成を支援していくうえで期待される、大学における社会的・職業的自立に関する指導等の推進を通じた今後の改善課題に係る若干の考察を行った。

この推進に係る施策およびそれを補完する取り組みに基づき、大学がさらに取り組むべき課題として、①就職・採用活動におけるミスマッチ、②「七五三現象」の2点をあげ、その課題解消のカギになるのは、キャリア教育・職業教育の充実とマッチング機能の向上である点を指摘し、改正設置基準の核となる専門知識をもったキャリアカウンセラー等の養成が急務であるとともに、学生に対し、労働法制や労働市場に係る教育の必要性を指摘した。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1)ビジネス環境と実務

新運営委員による運営委員会を3回開催した。「学生プレゼンテーション発表会」の名称変更並びに実施要項の改訂を行なった。また、次の研究会から発表要旨集を作成することを決定し、それに伴う発表原稿募集、ブロック会報掲載等に関する見直しを行なった。なお、ブロック会報は第24号を発行する。

第27回のブロック研究会は、2010年8月28日・29日の2日間にわたり、高松短期大学で開催された。会員等27名、学生プレゼンテーション出場学



生5名の計32名の参加が得られた。研究会は、総会、30周年記念全国大会の予選を兼ねた第5回学生プレゼンテーション大会、研究発表(10件)、の内容で実施された。研究発表会は、前回開催校の川崎医療福祉大学の今林宏典先生方から引き継いだ質疑応答の時間を確保し、今回も活発な質疑応答が行なわれ、研鑽を積むに相応しい場となった。恒例の懇親会は、高松国際ホテルに場所を移して行なわれ、くつろいだ雰囲気の中での有意義な交流のひとつを過ごした。

### 3. 学生プレゼンテーション大会

第5回目を迎えた学生プレゼンテーション大会は、30周年記念全国大会への出場学生を決定する選考会として、全国に先駆けて8月に実施した。本ブロックにおいては、今回が初めての選考会になることから、選考方法等について運営委員会で慎重に審議し、参加学生を募集した。山陽学園大学1名、広島女学院大学2名、広島国際大学1名、高松短期大学1名の5件の申し込みがあった。内容・方法ともに質の高いプレゼンテーションは甲乙つけがたく、審査員を大いに悩ました。選考の結果、最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞2名を決定し、全国大会には最優秀賞の学生が出場することとなった。

### 4. 今後に向けて

本ブロック会員数はここ数年70名前後を維持し、若手の先生・研究者の方々の入会も増えているが、今後も新会員の増大を図り、研究会の更なる発展につなげたい。また、共同研究助成の募集、全国大会プレゼンター・オブ・ザ・イヤー賞への参加を積極的に推進する。なお、総会において、次期(2011年)の研究会は広島市で開催すること、および2012年の全国大会を中国・四国ブロックが引き受けることについて承認を得た。

### 研究発表(1)

#### 感情労働概念についての考察

佐藤 麻衣(川崎医療福祉大学大学院 医療福祉マネジメント学研究科 修士課程1年)  
1983年に出版されたThe Managed Heart(1983)には、感情労働概念が提起されている。その著者は、アメリカの社会学者、ホックシールド(A. R. Hochschild)である。我が国においても、近年、感情労働についての研究は盛んに行われている。

筆者は修士課程において、「働く人々の表情が与える仕事効率への影響力」に関する研究を進めている。そこで今回の研究は、ホックシールドの感情労働概念の先行研究を中核とした。

感情労働の先行研究にあたり、各文献がどの領域の観点に立っているかで文献を概観した。本発表では、社会学、看護学、経営学、経済学、福祉学の5つの領域について述べた。各領域に定義や特徴があり、独自

的な展開によって感情労働概念が研究されていることが明らかとなった。

本研究は、秘書、中でも医療秘書を対象とした研究を進めていく。そこで今後は、より深く先行研究し、その上で実証研究と理論的側面の研究との統合化研究として考察するものである。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

### 研究発表(2)

#### 初年次情報教育についての一考察ーキャリア教育の視点からー

川 端 淑 子(山陽学園大学)  
発表の「概要と目的」は、「我が国における情報教育(ICT教育)の現状分析と初年次教育としての情報教育の考察」である。事例として、「①担当科目での試み、②日本とアメリカの初等中等教育機関の教育目標の相違」、さらにそれらを踏まえ「キャリア教育の視点から情報教育はどうあるべきか」をまとめる。現在高等教育機関で初年次教育の重要性が議論されている。日本語や数学などの基礎学力の上に、大学教育を受ける基本的スキルを身につけるのが初年次教育であるが、「情報教育」は不可欠である。情報機器が整備されていない時代より、システム化されていない情報教育を個々に受け、入学した学生への初年次情報教育はむしろ難しくなっている現状をまとめる。初年次情報教育では、キャリア教育の一環として、実践的な教育を行うことを心掛けてはいるが、短期的、個人的には問題は解決できないと認識している。現状の問題点を踏まえ、「問題提起と解決案」をまとめ発表した。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

### 研究発表(3)

#### プレゼンテーション授業を基盤としたPBLとその効果(その1)

石 井 三 恵・石 田 裕 子・河 野 彩(広島女学院大学)  
2010年2月から3月、2004年度から2009年度までの間、本学のプレゼンテーション関連科目を1科目でも履修した経験をもつ学生および卒業生の合計103名を対象にアンケート調査を実施し、回答率は35.9%であった。目的は、第一に学生の自主学習に対する思いを把握すること、第二に参加型学習の相乗効果を裏付ける自主学習の必要性を確認することである。

つまり、PDSサイクルに基づき、今後の授業展開に役立てるためであるが、本学では、プレゼンテーション能力育成の第一段階の目標達成を終え、既に第二段階に入ったと位置づけている。第二段階とは、学生自身を中心となり、反省反復の作業を行いながら実践されるグループ教育手法としてのPBL(Problem Based Learning/Project Based Learning)を展開することを意味している。学生の達成感のみならず、モチベーション維持への取組みと仕掛けを生み出し、プレゼンテーション能力とPBLの関係性を研究していく。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

### 研究発表(4)

#### コミュニケーション能力から創造力育成への試み

久 次 弘 子・角 谷 昌 則(広島国際大学)  
実務能力育成授業は、企業が期待するコミュニケーション・プレゼン

テーション能力を重視し、創造力は後回しで良いものだろうか。「創造的能力」は、ある刺激から多種多様な形の反応・着想・対応・問題提起を、独自行い行う能力とする見解がある。これをコミュニケーション・プレゼンテーションの場に重ね合わせると、良いコミュニケーションやプレゼンテーションとは、要素の異質な組み合わせをオファーすることで聴く人々を刺激し、その異質なアイデアに感化された人々によってさらなる新しいアイデアが生まれる状態のものを指すといえる。企業がコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を重視する理由は、単なる表現力ではなく、社内のグループ相互を刺激・啓発し、グループに創造力を発揮させるきっかけとなるからである。ここにおいて、重要といわれるコミュニケーション・プレゼンテーション能力と創造性とは密接な関連がある。創造的能力育成授業の一例を紹介した。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

### 研究発表(5)

#### ICTによる教育事例の紹介および今後のICT教育の動向についてー学生の勉強へのモチベーションを向上させる方法とはー

森 靖 之(高松短期大学)  
本研究では、ICTを利用した教育事例として、2年前によんでんメディアワークスさんと共同制作して製品化した就職活動支援を目的としたeラーニングコンテンツの紹介と、「eラーニング・モバイルラーニング」をキーワードとして、ICTを利用した教育で学生の勉強へのモチベーションを向上させる方法について発表した。

まず、eラーニングについては、10年くらい前に登場してから現在までの経緯についてと、現在のeラーニング2.0の状況について報告した。

また、モバイルラーニングとして、iPad、ニンテンドーDS、iPhone、スマートフォンを取り上げ、それぞれについての解説と現状を報告した。

最後に、ICTを利用しても、やる気のない学生に勉強させるのは難しいが、新しい勉強を始めるきっかけとなる可能性があることと、基礎能力を向上させるために、モバイルラーニングの教育コンテンツの開発には、今後期待がもてることを説明した。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

### 研究発表(6)

#### 情報公開と秘密の保護についての一考察(その2)ー一定型業務と非定型業務の分析を通してー

曾 根 康 仁(関西学院大学)  
本発表は、前回発表の続編としてのものである。今回は、特に学生による授業評価について一つの問題提起になればと考え研究を行った。本発表では、教育とは定型業務と違い、非定型業務として捉えている。ところで、授業評価を考える場合、教員と学生が一定レベル以上の互いの信頼感を形成していることが重要である。確かに教育を含め非定型業務的なものは、互いの信頼感が一定レベル以上あれば、情報公開を基にした授業評価等の必要性は高いものである。しかし、一定レベルに満たない場合は、かえって授業評価等を行うことにより、教育等による特長の低下を促進してしまうことも否めない。すなわち、本来非定型業務であるものが定型業務になってしまう恐れが考えられるのである。

一方、一般に非定型業務的なことから生まれる「群れ」という手段を取らないで「共存」・「共生」を望むという、社会の矛盾した面が浮かび上がっていると考えられるのである。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

### 研究発表(7)

#### 営利組織における戦略的経営の方法に関する基礎的研究

筑 後 一 郎(川崎医療福祉大学)  
本研究では、非営利組織における戦略的経営の浸透可能性について検討し、非営利組織の今日的な課題から戦略的に活動するための方策は何か、という点について明らかにしようとした。戦略が経営分野へ適用されるようになったのは、今から60年ほど前の1950年代からで、その後戦略の主要な関心は「組織をビジネス環境へ適応させること」に移っていった(Chaffee(1985))が、こうした考えはやがて陳腐化し、強みが弱みに変わってしまう危険性もはらんでおり、社会変化の急激な変化と相まって新たなセクター(非営利組織)の登場が戦略の考えを大きく変化させた。

これをふまえ、これからの非営利組織は、ボランティア実務に明るいスタッフの育成が必要となり、非営利組織に有給のスタッフを常駐させ、絶えず地域の困りごととは何か、地域にある資源は何があるか、地域に存在するボランティアはどんな人がいるかを総合的に組み合わせて、戦略的に組織を形成し、運営する能力を持ったスタッフを育てていくことが急務であることを指摘した。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 3) 個人とチームの実務能力の開発

### 研究発表(8)

#### 平成生まれの日本人大学生は「学校」をどう捉えているかー「学園ドラマ」を通じて見た彼らの基本概念ー

堀 口 誠 信(徳島文理大学短期大学部)  
対話型コミュニケーション能力と集団的問題解決能力にスポットを当てたフィンランド・メソッドは社会人基礎力の養成に見事に対応している。フィンランドの学校を視察した際、彼らの人間的性質は日本人と似ており、仲間集団圧力が強いなどの面を感じたが、学校に対する生徒の考え方は大きく違っていた。

そこで、学校に対する日本人の概念に影響を与えた要因である「学園ドラマ」に焦点を当て、私が受け持つ日本人大学生が影響を受けたと主張する番組を分類し、平成生まれの彼らが学校をどのように捉えている



かを考察した。

それらの学園ドラマから、社会人基礎力8項目のうちどの部分に前向きで強いメッセージを受けたか、というアンケート調査を分析すると、自分と共通する社会人基礎力のメッセージが読み取れる番組をチョイスし、それに共感して見ているが、自分達自身の「社会人基礎力」については反対の自己評価を下しがちであることが推察された。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

#### 研究発表(9) ビジネス実務教育における高大連携のあり方(その2)

佃 昌道・山野邦子・関田佳利・高塚順子・水口文吾(高松短期大学)  
今回は、香川県内の高等学校商業系の現状を含め、ビジネス実務教育の課題について考察を行った。

新高等学校学習指導要領の改訂によるビジネス実務及び関連科目の

## 九州・沖縄 ブロック

### ■ブロック研究会の年間活動報告

ブロックリーダー木原 す み 子(九州龍谷短期大学)

#### 1. ブロック研究会の報告

当ブロックでは、年2回の研究会を開催している。2010年度は、第48回、第49回研究会を開催した。

第48回研究会は、2010年10月2日(土)に佐賀県鳥栖市のサンメッセ鳥栖で行われ、3件の報告があった。研究報告は、ビジネス法制研究、教育への応用研究についてなされた。報告の後、「ビジネス実務」に関する情報交換、意見交換を行い、今後のブロック研究会の運営についても話し合いを行った。参加者は10名であったが、多くの意見が活発に出された。

第49回研究会は、2011年2月19日(土)に福岡県久留米市の信愛コラボレーションプラザリウムで開催された。参加者は19名であった。6月の全国大会での学生プレゼンテーション大会のブロック代表の学生を決定するため、ブロック研究会で学生プレゼンテーションを実施した。4名の学生の参加があり、それぞれにユニークなテーマに取り組み、いずれも優秀な発表であった。参加者に審査のご協力をいただき、最優秀を含む各賞を決定した。学生の真摯な発表に会員も一体となって実施することができ、終了後に学生に対するアドバイスも行った。発表して下さった学生、ご指導くださった先生方に深く感謝するとともに、審査・協力して下さった会員の方々に御礼申し上げます。

学生プレゼンテーションの終了後に、4件の研究報告を行った。研究報告は、理論研究、教育の事例報告、調査研究等について行われた。報告ごとに、質疑応答、意見交換が活発に行われた。新たな会員の参加もあり、研究会終了後の懇親会では、自己紹介、近況報告、情報交換等で

学習内容は、高等教育におけるビジネス実務教育との関連性が強い内容である。

また、高等学校教育課程の商業科の在籍状況を見ると、全国が6.7%、香川県が7.4%である。商業科に限った大学等進学率は、全国平均は2割台であるが、香川県内では3割後半から4割で推移している。本県では、商業高校における学生の進学熱が高い現状にある。

これらにより、商業教育における高等学校と高等教育機関との学習内容の円滑な連携・接続の検討は十分意味がある。とりわけ、ビジネス実務教育の観点からの、体系的学習の構築は、本学会の課題と考える。本研究では、学習指導要領の内容や高等学校の状況を把握しつつ、質保証に求められる体系的な学習計画と学習評価を含め、高等教育におけるビジネス実務教育のカリキュラムの再検討を行っている。今後は、学習ポートフォリオの開発も含め、その成果を報告する。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 1) ビジネス実務プログラム開発と教材開発プログラム

盛り上がった。

#### 2. ブロック運営と課題

研究会に先立ち運営委員会を開催して、研究会の内容や今後の活性化について検討している。2回目の運営委員会では、学生プレゼンテーション大会の内容確認と、次年度研究会の実施時期、次期役員やブロックリーダーの候補について検討を行った。次年度も従来通り、年2回のブロック研究会を開催し、できるだけ多くの会員の発表の機会を設けることとした。

研究会で運営委員会の報告をするとともに、次期役員やブロックリーダーの候補については参加会員に諮り、案が了承された。また、運営委員についてもできるだけ交代していき、多くの会員に参加・協力していただけるようお願いした。

会員数については、現会員の紹介もあって、前年度に引き続き2010年度も少し増加している。それに伴い、新会員の報告や参加が見られるようになっていく。一方で、登録のみの会員もいるので、多くの会員に参加・報告してもらうための研究会の活性化の工夫が必要である。

研究報告では、教育機関の会員の授業内容の事例や指導方法に関するものが多い。研究報告は単独発表がほとんどであるが、グループ研究などの会員相互の研究交流もなされれば、研究会もより活性化される。報告内容についても、理論研究や、企業や現場からの実践報告や



提案なども多くなされ、ともに研鑽できる研究会になることを期待している。

最後に当ブロックのリーダーとして2期にわたって担当させていただきました。任期中に、全国大会、学会の助成研究と大きな行事が続きましたが、何とか皆さまのご協力のおかげで終了することができました。学会役員や会員の皆さま方に感謝申し上げます。

#### 研究発表(1) 中国ビジネス法制に関する一考察(その3)

北原 康 司(釜山女子大学)

中国のビジネスに関する法制度の中から、情報通信、信託、リース、環境保護に関する法律制度について論ずる。情報通信業は、大きく①情報の伝達業務、②情報の処理、加工、提供等サービス業務、③インターネットに付随したサービス業務に分類できる。中国の信託法は、信託の基本関係を定めた法律で、信託の設定、信託財産、信託当事者、信託の変更および終了、公益信託について規定している。リースに関する立法について契約法の第13章および第14章、外商投資リース業管理規則、金融リース会社管理規則、企業会計規則第21号、その他多くの税務、税関の通達がある。このうち契約法は、賃貸借契約ならびにファイナンスリース契約に関するルールを定めている。中国での事業展開には、環境保護規制の重要性が増加している。工場建物等の全ての建設について環境への影響を分析する必要があり、業種によって騒音、廃棄物、廃棄等の具体的な規制に服する必要があるため、これらの規制内容を理解する必要がある。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1) ビジネス環境と実務

#### 研究発表(2) OJTの大学教育への応用～社会人基礎力向上に着目して～

長 野 史 尚(九州共立大学)

学生が「何か」を「習得する」際、その理由として、指導経験上では、①そのこと自体に興味・関心がある、②必要にせまられる、③その他、という3つに大別できそうである。興味・関心があればそれで良いが、いかに必要にせまられた状況をつくることができるかが指導のポイントではないかと考えた。

本研究では、大学教育の中でOJTという能力開発方法(教育方法)が応用可能であるかを検討してみた。OJTは職場内で上司、先輩が部下に日常の仕事を通じて必要な知識、技能、仕事への取組み等を教育する手法であり、必要にせまられながら学ぶ方法である。本学で演習授業等で行われているプロジェクト型教育(PBL)などの実践型・参加型の学習機会においては、OJTの手法を上手に取り入れて教育することで、『行動能力』をもつ人材を効果的に育成できるのではないかと考える。実際のプログラムや効果測定については、今後の研究課題としていく。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2) 授業方法の研究

#### 研究発表(3) クラウドコンピューティングと教育への応用

山 本 浩 貴(東筑紫短期大学)

この数年クラウドビジネスは大きく進展しており、ITビジネスはクラウドに大きく移行している。クラウドビジネスの特徴は、高度情報サービスを専門とするクラウド側と、操作性を重視しクラウドの端末に特化したスマートフォンやスレートPCなどの端末側の普及という、両端の市場が発展しているのが特徴である。

クラウドを利用した情報教育の一例として、クラウド側にeラーニング教材を開発し、それをデバイス端末iPadを使って学習する環境を構築して、教育環境として有効かを検証した。iPadはすぐに起動し、タッチスクリーンによる感覚的な操作ができ、操作性は教育機器として大変優れていると感じた。初心者でも最初から学習コンテンツ自体に集中して学習することができる。学習教材として充分活用できると感じた。

高度な処理はクラウド側で、快適な操作はデバイス端末側でという使い分けは大変有効で、大きな学習効果が期待できると感じた。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 1) ビジネス実務プログラム開発と教材開発プログラム

#### 研究発表(4) マネジメントとの関連からみるビジネス実務教育 ーカール・マンハイムにおける科学のとらえ方を基にしてー

西 村 香 織(折尾愛真短期大学)

ビジネス実務教育に対しては、「技術の学」としてのとらえ方をされる場合が多い。ビジネス実務教育が「科学的な学」として成立するためには、流動のうちに根ざし、常に生成しつつある領域の中で、主体と対象との能動的共働作用によって出来る限り全体を把握しようと追い求めていくことが科学であるとする、カール・マンハイムのような科学のとらえ方を基礎に置くことが重要になる。

具体的には、それはビジネス実務教育をマネジメントとの関連で見えていく視点をもつことであると考えることができる。この視点をもつとき、ビジネス実務教育は、不確実なもの、分からないものが絡まりあっている、まさにそのビジネスの現場から、全体を動かしていく基点としての重要な意義と役割を持つことになる。そして、現代組織や社会が直面する問題に对应していくことの出来る人を育てるという内容をもつ「科学的な学」になると考えられるのである。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2) 時代を切り拓くビジネス実務

#### 研究発表(5) 気づきと内発的動機を高める教育技法(事例報告)

大 橋 健 治(筑紫女学園大学短期大学部)

短大1年生25名を対象とした集中講義で、アクションラーニングを試行した。アクションラーニングは、自らが抱えている現実の問題を提示し、協同学習のメンバーから寄せられる質問に答えながら問題の本質に気づき、改善活動に着手することを促す学習技法である。企業における実践例は多いが、大学教育における実践例は希少である。試行した授業は、本年2月7日～9日に実施した短大1年生向けの集中講義である。

進行要領は、マイケルJ・マーコード／アクションラーニング研究会訳(2001)『アクションラーニング研修マニュアル』日本能率協会マネジメント

センターを参照した。受講者は、進行に慣れるまではやや戸惑いがあったものの回を重ねる毎に上達した。アンケートやレポートの分析により、アクションラーニングは、短大1年生に対しても気づきと内発的動機を高揚させる効果があることが確認できた。

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2)授業方法の研究

研究発表(6)  
中国ビジネス法制に関する一考察(その4)

北原康司(釜山女子大学)  
中国でのビジネスに関する法制度の中から、広告、建築、裁判、仲裁に関する法律制度について論ずる。広告法は、消費者の保護および社会経済秩序の維持などの観点から、広告の内容に関する規制のほか、広告主や広告代理店等の活動、広告の審査、法律責任等について規定している。建築法は、中国が建設活動を規制する基本法である。建設業は、中国の重要な主幹産業の一つであり、建築法の公布は中国政府による国内建設活動規制にとって極めて重要な意義を持つ。裁判では、中国における法的な紛争解決手段として、訴訟と仲裁がある。

訴訟は、裁判機関が法的な判断を下し紛争を解決する手段である。訴訟と裁判は同じ意味で使用され民事訴訟法によることが多い。中国の裁判機関は、人民法院と呼ばれている。仲裁とは、裁判所に代わる第三者に紛争解決を委ねる手段である。中国における仲裁機関は複数あり、国際紛争処理には中国国際経済貿易委員会による仲裁がよく利用される。中国では仲裁法が仲裁に関する基本的な法規であり、国内仲裁と涉外仲裁の両方を定めている。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1)ビジネス環境と実務

研究発表(7)  
学生のキャリアパターン意識と仕事へのこだわり度

大重康雄(鹿児島女子短期大学)  
就業力支援とともに、就業後のライフ・プランニングについて自律的に考え、現実妥当な判断力が必要である。今回の報告は一般企業への就業を目指す学生(本学の教養学科学生)が、卒業後どのようなライフスタイルを描いているのか、その意識状況を把握するために簡単なアンケートを実施し、学内での就業力支援の方向性について考察したものである。多くの学生は可能な限り、長い賃金生活を望んでいる。但し多くの学生が結婚・出産を契機に一旦退職し家庭に入ることを望むという結果が出た。

国際的調査(GEMやGGI)によるジェンダーに関する日本の水準は先進諸国で最低ランクにあり、また「鹿児島の男女の意識に関する調査(2007年)」においてもさらに保守性の強い結果が示されている。ジェンダー視点にも地域性があり、そのことを踏まえたキャリア教育・ビジネス実務教育が必要であり、女性参画をこれまで以上に推進していかなければならないと感じた。

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1)ビジネス環境と実務



研究発表一覧

研究対象領域:【1】ビジネス実務教育開発研究 1)ビジネス実務プログラム開発と教材開発プログラム

- 学生によるプレゼンテーション評価データの分析  
ー学生へのよりよいフィードバックの検討ー  
足塚智志(大手前大学)、畑野清司(四條囃学園短期大学)
- 「きく・話す」能力の教育技法 ー社会人基礎力を中心としてー  
油谷純子(目白大学短期大学部)、有働壽恵(芦屋女子短期大学)、中川伸子(神戸女子短期大学)、仁平章子(四條囃学園短期大学)、服部美樹子(大阪学院短期大学)、福井愛美(大手前大学)、加藤晴美(ブルー学院大学短期大学部)

- ビジネス実務教育における高大連携のあり方(その2)  
佃昌道・山野邦子・関由佳利・高塚順子・水口文吾(高校短期大学)
- クラウドコンピューティングと教育への応用  
山本浩貴(東筑紫短期大学)

研究対象領域:【1】ビジネス実務の教育開発研究 2)授業方法の研究

- キャリア教育の課題と展望  
武井昭也(札幌国際大学)
- 短大卒女子のキャリア形成支援  
ー乗り越え力を強化するためのプログラム試案ー  
和田佳子(北海道武蔵女子短期大学)

- 短大生活による学生の能力向上の自覚  
ー学生支援プログラムにおけるアンケート結果よりー  
小林純(札幌国際大学短期大学部)
- スタートアッププログラムからみる大学生のキャリア教育の課題  
加藤由紀子(北海商科大学)

- 学生3言語に関する研究  
佐藤美津子・高橋順子・齋藤裕美(多摩大学)、長谷川美千留(八戸大学)、山本美奈子(株式会社メディネット)、田中敬子(コムネット)
- キャリア教育の一環としてのビジネスマナー教育の効果測定  
藤原由美・菅井郁(自由が丘産能短期大学)
- 起業意識を高めるビジネス実務教育  
川口直子(愛知学泉短期大学)、水口美知子(名古屋経済大学短期大学部)、河野篤(中部学院大学)、平田祐子(高田短期大学)、寺島雅隆(愛知学泉短期大学)
- 本学における簿記教育上の問題把握と仮説検証  
河合晋(岡崎女子短期大学)
- プレゼンテーションツールとしてのISO32000-1の活用について  
町田由徳(岡崎女子短期大学)
- コース別インターンシップによる就業力育成  
ー平成22年度大学生の就業力育成支援事業で目指すものー  
水口美知子(名古屋経済大学短期大学部)

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 1)ビジネス環境と実務

- 新卒採用における学生と企業のミスマッチ解消に向けての考察  
渡邊大輔(株式会社クオリティ・オブ・ライフ)、大宮智江(川口短期大学)
- 携帯メール利用によるネットワークとその応用  
國田千恵子・田畑圭介・小林淳一(金沢学院短期大学)
- 工業技術ビジネス実務教育論に関する研究1  
ー工業技術ビジネス実務教育の概念試論ー  
林雄太郎(大阪キリスト教短期大学)
- 「大学における社会的・職業的自立に関する指導等の推進」施策に関する一考察  
前角和宏(神戸海星女子学院大学)

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 2)時代を切り拓くビジネス実務

- カルテ・ディクテーションにおける必要技能調査  
ー米国病院視察による事例調査からー  
米本倉基(岡崎女子短期大学)
- 大学・短大と専門学校のボーダレス化についての一考察  
奥村幸夫(愛知産業大学短期大学)
- 大学・短期大学における企業倫理教育の確立へ向けた予備的考察  
矢口義教(富山短期大学)
- 感情労働概念についての考察  
佐藤麻衣(川崎医療福祉大学大学院 医療福祉マネジメント学研究科 修士課程1年)

研究対象領域:【2】ビジネス実務の調査・研究 3)個人とチームの実務能力の開発

- 企業と学生から見たインターンシップ効果  
ー企業の評価と学生の自己評価を比較してー  
和田早代(札幌国際大学)
- 専門学校における観光インターンシップの実践について  
ー北海道観光学科の学生の实態を中心にー  
千葉里美(札幌商工会議所付属専門学校)
- 日本経済を好転させるビジネス系検定1級  
小林正彦(元・大阪経済大学)、林正和(大阪経済大学4年)

- 初年次情報教育についての考察ーキャリア教育の視点からー  
川端淑子(山陽学園大学)
- プレゼンテーション授業を基盤としたPBLとその効果(その1)  
石井三恵・石田裕子・河野彩(広島女学院大学)
- コミュニケーション能力から創造力育成への試み  
久次弘子・角谷昌則(広島国際大学)
- ICTによる教育事例の紹介および今後のICT教育の動向について  
ー学生の勉強へのモチベーションを向上させる方法とはー  
森靖之(高松短期大学)
- OJTの大学教育への応用ー社会人基礎力向上に着目してー  
長野史尚(九州共立大学)
- 気づきと内発的動機を高める教育技法(事例報告)  
大橋健治(筑紫学園大学短期大学部)

- 中国ビジネス法制に関する一考察(その3)  
北原康司(釜山女子大学)
- 中国ビジネス法制に関する一考察(その4)  
北原康司(釜山女子大学)
- 学生のキャリアパターン意識と仕事へのこだわり度  
大重康雄(鹿児島女子短期大学)

## ○2010年度ブロック運営委員

### ■北海道ブロック

◎和田佳子(北海道武蔵女子短期大学)  
○武井昭也(札幌国際大学)  
椿 明美(札幌国際大学短期大学部)  
佐々木邦子(北翔大学)  
加藤由紀子(北海医科大学)  
大塚 映(札幌医療福祉専門学校)  
官尾昌子(北海道武蔵女子短期大学)  
和田早代(札幌国際大学)  
高橋秀幸(札幌啓北商業高等学校)

### ■関東・東北ブロック

◎坪井明彦(高崎経済大学)  
○岡田小夜子(福島学院大学短期大学部)  
○飯塚順一(湘北短期大学)  
阿部康子(山形短期大学)  
石井典子(東京経営短期大学)  
牛島倫子(鶴見大学短期大学部)  
大宮智江(川口短期大学)  
北垣日出子(日本橋学館大学)  
北川宣子(カリタス女子短期大学)  
菅井 郁(自由が丘産能短期大学)  
高橋真知子(常磐短期大学)  
寺村絵里子(国際短期大学)  
島田幸恵(湘南短期大学)  
長谷川文代(湘北短期大学)

藤原由美(自由が丘産能短期大学)  
山口憲二(新潟学園短期大学)

### ■中部ブロック

◎岡野絹枝(金城大学短期大学部)  
○川口直子(愛知学泉短期大学)  
○米本倉基(岡崎女子短期大学)  
西川三恵子(名古屋経営短期大学)  
梅村信夫(名古屋学芸大学短期大学部)  
大崎佑一(富山短期大学)  
國田千恵子(金沢学院短期大学)  
佐久間 潔(修文大学短期大学部)  
寺島雅隆(愛知学泉短期大学)  
平田祐子(高田短期大学)

### ■近畿ブロック

◎磯林征一(園田学園女子大学)  
足塚智志(大手前大学)  
加藤晴美(ブール学院大学短期大学部)  
荻野正美(ブール学院大学短期大学部)  
児島尚子(大阪樟蔭女子大学短期大学部)  
塚原昭人(四天王寺大学)  
徳田 豊(関西外国語大学短期大学部)  
中川伸子(神戸女子短期大学)  
仁平章子(四條囃学園短期大学)  
野坂純子(大手前短期大学)

服部美樹子(大阪学院短期大学)  
樋口勝一(神戸海星女子学院大学)  
油谷純子(目白大学短期大学部)

### ■中国・四国ブロック

◎山野邦子(高松短期大学)  
○篠原 收(広島女学院大学)  
樋口紀子(梅光学院大学)  
水代 仁(松山東雲短期大学)  
神戸康弘(山陽学園短期大学)  
田中伸代(川崎医療福祉大学)  
水口文吾(高松短期大学)

### ■九州・沖縄ブロック

◎木原すみ子(九州龍谷短期大学)  
○山本浩貴(東筑紫短期大学)  
有馬恵子(鹿児島女子短期大学)  
大重康雄(鹿児島女子短期大学)  
大城智美(沖縄女性研究者の会)  
坂本一登(福岡女子短期大学)  
白川美知子(九州共立大学)  
杉原英夫(元九州共立大学)  
西村香織(折尾愛真短期大学)  
花崎正子(九州共立大学)

◎印…ブロックリーダー  
○印…サブリーダー

## 2010年度新入会員(正会員) (2010年8月25日～2011年3月20日常任理事会承認分まで) ※敬称略

### ■正会員

|                    |                     |                    |
|--------------------|---------------------|--------------------|
| 直江 一彦<(医)順正会 蓮田病院> | 山本 美奈子<(株)メディネット>   | 千葉 里美<(札幌商工会議所)>   |
| 関 憲治<自由が丘産能短期大学>   | 佐藤 喜一<新潟大学>         | 長井 定明<徳島文理大学短期大学部> |
| 佐藤 知条<湘北短期大学短期大学部> | 加藤 達也<名古屋経営短期大学>    | 天沼 真佐子<湘北短期大学>     |
| 江頭 万里子<長崎女子短期大学>   | 大和 由美<姫路情報システム専門学校> | 飯田 哲司<中国短期大学>      |
| 黒野 伸子<藤田保健衛生大学>    | 吉田 順子<鶴見イズミ>        | 美濃浦 利夫<大阪成蹊短期大学>   |
| 尾関 智恵<㈱インテックス>     | 田邊 節子<ブール学院大学短期大学部> |                    |
| 高橋 順子<多摩大学>        | 河合 行宏<㈱モバイルサポート>    |                    |

## 第30回記念全国大会のご案内 (詳しくは「2号通信」をご覧ください)

30回記念として、様々な記念企画が開催されます。皆さま、奮ってご参加ください。

- 日 時：2011年6月4日(土)、5日(日)
- 会 場：大手前大学 さくら夙川キャンパス
- テ — マ：「ビジネス実務研究の現状と課題  
—学習者中心のビジネス実務教育をめざして—」

### 【記念企画】パネルディスカッション

「研究のあゆみと成果、そして今後」

### 【記念企画】全国学生プレゼンテーション大会

各ブロックから選抜された6名の学生が、プレゼンテーション力を競います。

### 【記念講演】

「グローバル人材育成 —企業のアジア戦略と人材育成—」

講師：パナソニック電工創研株式会社前社長 櫻井 章 司氏



懇親会会場：アートセンター  
(安藤忠雄氏設計)



# 日本ビジネス実務学会

## 会報 No.54

2011年4月10日発行  
発行／日本ビジネス実務学会広報委員会

事務局／〒664-0861 兵庫県伊丹市鞆野町2-2-2 大手前短期大学内 Tel&Fax072-770-6343  
URL : <http://www.b-jitsumu.com/> E-mail : [jsabs@otemae.ac.jp](mailto:jsabs@otemae.ac.jp)



## Contents

### 2010年度ブロック研究会活動報告

|           |    |
|-----------|----|
| 北海道ブロック   | 02 |
| 関東・東北ブロック | 04 |
| 中部ブロック    | 05 |
| 近畿ブロック    | 07 |
| 中国・四国ブロック | 09 |
| 九州・沖縄ブロック | 12 |

### 研究発表一覧

2010年度ブロック運営委員 16

2010年度新入会員 16

第30回記念全国大会のご案内 16